

津市監第477号

平成24年8月17日

津市長 前 葉 泰 幸 様

津市監査委員 渡 邊 昇

津市監査委員 駒 田 修 一

津市監査委員 横 山 敦 子

津市監査委員 宇 陀 照 良

平成23年度津市健全化判断比率及び資金不足比率審査意見について（提出）

地方公共団体の財政の健全化に関する法律（平成19年法律第94号。以下「財政健全化法」という。）第3条第1項及び第22条第1項の規定に基づき審査に付された平成23年度津市健全化判断比率及び資金不足比率の審査意見について、別添のとおり提出します。

平成 23 年 度

津市健全化判断比率及び資金不足比率
審 査 意 見 書

津 市 監 査 委 員

目 次

《健全化判断比率・資金不足比率の概要》

第1 健全化判断比率の概要	1
第2 資金不足比率の概要	4

《平成23年度津市健全化判断比率及び資金不足比率審査意見》

第1 審査の対象	5
第2 審査の期間	5
第3 審査の方法	6
第4 審査の結果	6
1 健全化判断比率	7
(1) 実質赤字比率	7
(2) 連結実質赤字比率	9
(3) 実質公債費比率	12
(4) 将来負担比率	14
2 資金不足比率	16
(1) 津市水道事業会計に係る資金不足比率	16
(2) 津市工業用水道事業会計に係る資金不足比率	18
(3) 津市駐車場事業会計に係る資金不足比率	19
(4) 津市農業共済事業会計に係る資金不足比率	20
(5) 津市風力発電事業特別会計に係る資金不足比率	21
(6) 津市簡易水道事業特別会計に係る資金不足比率	22
(7) 津市農業集落排水事業特別会計に係る資金不足比率	24
(8) 津市下水道事業特別会計に係る資金不足比率	25

凡 例

- 1 文中及び表中に用いる健全化判断比率及び資金不足比率の算定に係る数値は、算定要領上の端数処理により表示しているため、平成23年度津市一般会計・特別会計歳入歳出決算審査意見書及び平成23年度津市公営企業会計決算審査意見書に表示した数値と一致しない場合がある。
- 2 表中の符号の用法は、次のとおりである。
 - 「－」・・・該当比率がないもの
 - 「△」・・・負数のもの
 - 「P」・・・パーセンテージ間の差引数値

健全化判断比率・資金不足比率の概要

第1 健全化判断比率の概要

1 実質赤字比率

$$\text{実質赤字比率} = \frac{\text{一般会計等の実質赤字額}}{\text{標準財政規模の額}}$$

「一般会計等の実質赤字額」は、一般会計及び特別会計のうち普通会計に相当する会計における実質赤字額である。

「実質赤字額」は、繰上充用額（形式赤字額＋（制度上の繰越額－未収入特定財源の額））、支払繰延額及び事業繰越額の合計額である。

2 連結実質赤字比率

$$\text{連結実質赤字比率} = \frac{\text{連結実質赤字額}}{\text{標準財政規模の額}}$$

「連結実質赤字額」は、次のイとロの合計額が、ハとニの合計額を超える場合において、その超える額である。

イ 一般会計及び公営企業（法適用企業・法非適用企業をいう。以下同じ。）

以外の特別会計における実質赤字額の合計額

ロ 公営企業の特別会計（宅地造成事業以外のもの）における資金の不足額の合計額

※ 法適用企業の「資金の不足額」は、流動負債の額と、建設改良費等以外の経費の財源に充てる地方債の現在高の合計額が、流動資産の額（繰越財源の額を除く。）を超える場合は、その超える額から解消可能資金不足額を控除した額

※ 法非適用企業の「資金の不足額」は、歳出額と、建設改良費等以外の経費の財源に充てる地方債の現在高の合計額が、歳入額（繰越財源の額を除く。）を超える場合は、その超える額から解消可能資金不足額を控除した額

※ 「解消可能資金不足額」は、事業の性質上、事業開始後一定期間、構造的に資金の不足額が生じる場合に、資金の不足額から控除する一定の額

ハ 一般会計及び公営企業以外の特別会計における実質黒字額の合計額

※ 「実質黒字額」は、歳入額（繰越財源の額を除く。）が、歳出額を超える場合は、その超える額

ニ 公営企業の特別会計（宅地造成事業以外のもの）における資金の剰余額の合計額

※ 法適用企業の「資金の剰余額」は、流動資産の額（繰越財源の額を除く。）が、流動負債の額と、建設改良費等以外の経費の財源に充てる地方債の現在高の合計額を超える場合は、その超える額

※ 法非適用企業の「資金の剰余額」は、歳入額（繰越財源の額を除く。）が、歳出額と、建設改良費等以外の経費の財源に充てる地方債の現在高の合計額を超える場合は、その超える額

3 実質公債費比率

$$\text{実質公債費比率 (3 か年平均)} = \frac{(\text{地方債の元利償還金} + \text{準元利償還金}) - (\text{特定財源} + \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}{\text{標準財政規模の額} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$$

「準元利償還金」は、次のイからホまでの合計額

イ 満期一括償還地方債について、償還期間を 30 年とする元金均等年賦償還した場合における 1 年当たりの元金償還金相当額

ロ 一般会計等から一般会計等以外の特別会計への繰出金のうち公営企業債の償還の財源に充てたと認められるもの

ハ 一部事務組合等への負担金等のうち一部事務組合等が起こした地方債の償還の財源に充てたと認められるもの

ニ 債務負担行為に基づく支出のうち公債費に準ずるもの

ホ 一時借入金の利子

「基準財政需要額算入額」は、地方債の元利償還金・準元利償還金に係る普通交付税額の算定に用いる基準財政需要額に算入される額として総務省令で定めるところにより算定した額（将来負担比率について同じ。）

4 将来負担比率

$$\text{将来負担比率} = \frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金の額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模の額} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$$

「将来負担額」は、次のイからチまでの合計額

イ 一般会計等の平成 23 年度末における地方債の現在高

ロ 債務負担行為に基づく支出予定額

- ハ 一般会計等以外の特別会計の地方債の償還に充てるための一般会計等の負担見込額
- ニ 一部事務組合等の地方債の償還に充てるための負担見込額
- ホ 退職手当支給予定額のうち一般会計等の負担見込額
- ヘ 地方公共団体が設立した一定の法人の負債の額等のうち当該法人等の財務・経営状況を勘案した一般会計等の負担見込額
- ト 連結実質赤字額
- チ 一部事務組合等の連結実質赤字額相当額のうち一般会計等の負担見込額

「充当可能基金の額」は、イからへまでの負担見込額等に充当可能な基金の額

「特定財源見込額」は、イからニまでの負担見込額等に充当可能な特定歳入見込額

5 参 考

(1) 早期健全化基準

地方公共団体の財政の健全化に関する法律施行令（平成 19 年政令第 397 号。以下「財政健全化法施行令」という。）第 7 条で定める財政の早期健全化（財政状況が悪化した状況において、自主的かつ計画的にその財政の健全化を図ることをいう。）を図るべき基準で、平成 23 年度の決算に係る健全化判断比率のいずれかが、健全化判断比率ごとに定められた早期健全化基準以上である場合（財政再生基準以上である場合を除く。）は、財政健全化計画を定めなければならない。

(2) 財政再生基準

財政健全化法施行令第 8 条で定める財政の再生（財政状況の著しい悪化により自主的な財政の健全化を図ることが困難な状況において、計画的にその財政の健全化を図ることをいう。）を図るべき基準で、平成 23 年度の決算に係る実質赤字比率、連結実質赤字比率及び実質公債費比率（以下「再生判断比率」という。）のいずれかが、再生判断比率ごとに定められた財政再生基準以上である場合は、財政再生計画を定めなければならない。

第2 資金不足比率の概要

1 資金不足比率

$$\text{資金不足比率} = \frac{\text{資金の不足額}}{\text{事業の規模の額}}$$

「資金の不足額」（公営企業の特別会計（宅地造成事業以外のもの））は、公営企業ごとに次のとおり算定した額

※ 法適用企業の「資金の不足額」は、流動負債の額と、建設改良費等以外の経費の財源に充てる地方債の現在高の合計額が、流動資産の額（繰越財源の額を除く。）を超える場合は、その超える額から解消可能資金不足額を控除した額

※ 法非適用企業の「資金の不足額」は、歳出額と、建設改良費等以外の経費の財源に充てる地方債の現在高の合計額が、歳入額（繰越財源の額を除く。）を超える場合は、その超える額から解消可能資金不足額を控除した額

「事業の規模の額」は、公営企業ごとに次のとおり算定した額

※ 法適用企業の「事業の規模の額」は、営業収益の額から受託工事収益の額を控除した額

※ 法非適用企業の「事業の規模の額」は、営業収益に相当する収入の額から受託工事収益に相当する収入の額を控除した額

2 参 考

経営健全化基準は、財政健全化法施行令第19条で定める公営企業の経営の健全化を図るべき基準で、平成23年度の決算に係る資金不足比率が、経営健全化基準以上である場合は、経営健全化計画を定めなければならない。

平成23年度津市健全化判断比率及び資金不足比率審査意見

第1 審査の対象

審査の対象は、次の平成23年度津市健全化判断比率及び資金不足比率並びにこれらの比率の算定の基礎となる事項を記載した書類（以下「算定基礎書類」という。）である。

1 健全化判断比率

- (1) 実質赤字比率
- (2) 連結実質赤字比率
- (3) 実質公債費比率
- (4) 将来負担比率

2 資金不足比率

- (1) 津市水道事業会計に係る資金不足比率
- (2) 津市工業用水道事業会計に係る資金不足比率
- (3) 津市駐車場事業会計に係る資金不足比率
- (4) 津市農業共済事業会計に係る資金不足比率
- (5) 津市風力発電事業特別会計に係る資金不足比率
- (6) 津市簡易水道事業特別会計に係る資金不足比率
- (7) 津市農業集落排水事業特別会計に係る資金不足比率
- (8) 津市下水道事業特別会計に係る資金不足比率

第2 審査の期間

1 健全化判断比率

健全化判断比率の審査の期間は、平成24年8月2日から同年8月16日までである。

2 資金不足比率

資金不足比率の審査の期間は、地方公営企業法（昭和27年法律第292号）を適用する公営企業（以下「法適用企業」という。）の特別会計に係る資金不足比率については、平成24年6月25日から同年8月16日まで、同法を適用しない公営企業（以下「法非適用企業」という。）の特別会計に係る資金不足比率については、同年7月11日から同年8月16日までである。

第3 審査の方法

審査の方法は、健全化判断比率及び資金不足比率について、主に次の諸点に着眼し、算定基礎書類の数値の根拠となる資料により照合審査するとともに、関係職員の説明を求め、平成23年度津市一般会計・特別会計歳入歳出決算及び平成23年度津市公営企業会計決算の審査の結果も参考とした。

- 1 健全化判断比率及び資金不足比率は、財政健全化法に基づき適正に算定されているか。
- 2 算定基礎書類に記載された数値は、正確に算定されているか。
- 3 算定過程における判断は、客観的妥当性を有するものであるか。

第4 審査の結果

健全化判断比率及び資金不足比率並びに算定基礎書類の審査の結果は、次に記載したとおりである。

1 健全化判断比率

(1) 実質赤字比率

ア 審査の結果

実質赤字比率（表 1 参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表 1 実質赤字比率 (単位：%)

決算年度		実質赤字比率	早期健全化基準 (注 1)	財政再生基準 (注 2)
平成 23 年度		—	11.25	20.00
参考	平成 22 年度	—		
	増 減	—		

(注 1) 財政健全化法施行令第 7 条第 1 号ハに定めるところにより算定した数値

(注 2) 財政健全化法施行令第 8 条第 1 号ハに定める数値

イ 審査の概要

実質赤字比率は、一般会計等（津市一般会計、津市土地区画整理事業特別会計及び津市住宅新築資金等貸付事業特別会計をいう。以下同じ。）の実質赤字額（繰上充用額、支払繰延額及び事業繰越額の合算額）を、標準財政規模の額（臨時財政対策債発行可能額を含む。以下同じ。）で除して得た数値となる。

審査に付された実質赤字比率は、実質赤字額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、これらの算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

まず、繰上充用額について見ると、一般会計等相互間の繰入れ・繰出しによる重複額を控除した純計による歳入の合計額は 1,050 億 2,050 万 7 千円、歳出の合計額は 1,011 億 3,773 万 9 千円で、形式収支額は 38 億 8,276 万 8 千円となる。

そして、形式収支額から平成 24 年度へ繰り越すべき財源（以下「繰越財源」という。）6 億 7,061 万 9 千円（継続費逓次繰越額及び繰越明許費繰越額の合計額 25 億 731 万 1 千円から未収入特定財源（国・県支出金、地方債等）の合計額 18 億 3,669 万 2 千円を差し引いた額）を控除した額は 32 億 1,214 万 9 千円となり、繰上充用額は生じていない。

次に、支払繰延額・事業繰越額について見ると、支払繰延額はなく、

事業繰越額は 26 万 8 千円であることから、32 億 1,214 万 9 千円（形式収支額から繰越財源の額を控除した額）から事業繰越額を控除した実質収支は 32 億 1,188 万 1 千円の黒字となり、実質赤字額は生じていない。

なお、実質収支額の状況を示すと表 2 のとおりとなる。

表 2 実質収支額の状況

（単位：千円・％）

区	分	金額等
一般会計等の歳入合計額 (A)		105,020,507
一般会計等の歳出合計額 (B)		101,137,739
形式収支額 (C)		(A) - (B) 3,882,768
繰越財源の額 (D)		(E) + (F) - (G) 670,619
	継続費通次繰越額 (E)	1
	繰越明許費繰越額 (F)	2,507,310
	未収入特定財源の額 (G)	1,836,692
形式収支額 - 繰越財源の額 (H)		(C) - (D) 3,212,149
支払繰延額・事業繰越額 (I)		268
実質収支額 (J)		(H) - (I) 3,211,881
内 訳	津市一般会計	3,993,908
	津市土地区画整理事業特別会計	△777,874
	津市住宅新築資金等貸付事業特別会計	△4,153
標準財政規模の額 (K)		66,228,474
	うち臨時財政対策債発行可能額	5,100,130
実質収支額の標準財政規模の額に対する比率		(J) ÷ (K) 4.84

(2) 連結実質赤字比率

ア 審査の結果

連結実質赤字比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 連結実質赤字比率 (単位：%)

決算年度		連結実質赤字比率	早期健全化基準 (注1)	財政再生基準 (注2)
平成23年度		—	16.25	30.00
参考	平成22年度	—		
	増減	—		

(注1) 財政健全化法施行令第7条第2号ハに定めるところにより算定した数値

(注2) 財政健全化法施行令第8条第2号ハに定める数値

イ 審査の概要

連結実質赤字比率は、一般会計等及び一般会計等以外の特別会計のうち公営企業以外の特別会計(津市椋本財産区特別会計を除く。以下同じ。)における実質赤字額と公営企業の特別会計における資金の不足額の合計額が、これらの会計の実質黒字額と資金の剰余額の合計額を超える場合、その超える額(以下「連結実質赤字額」という。)を、標準財政規模の額で除して得た数値となる。

審査に付された連結実質赤字比率は、連結実質赤字額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、これらの算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

まず、一般会計等については、実質赤字比率で見たように、実質収支は32億1,188万1千円の黒字となり、実質赤字額は生じていない。

次に、一般会計等以外の特別会計のうち公営企業以外の特別会計について見ると、津市モーターボート競走事業特別会計等の4特別会計(表2参照)が対象となるが、これらの特別会計の歳入の合計額は881億1,015万円、歳出の合計額は874億7,083万3千円で、形式収支額は6億3,931万7千円となる。

そして、繰越財源の額、支払繰延額及び事業繰越額はなく、実質収支は6億3,931万7千円の黒字となり、実質赤字額は生じていない。

次に、公営企業の特別会計について見ると、まず、法適用企業の特別会計は、津市水道事業会計等の4特別会計(表2参照)が対象となるが、これらの特別会計の、流動資産の合計額は76億1,682万8千円で、そこから控除すべき繰越財源の額はなく、一方、流動負債の合計額は8億5,040万4千円で、これに合算すべき建設改良費等以外の経費に充てるための地方債の現在高はないことから、67億6,642万4千円の剰余額が生じることになる。

さらに、法非適用企業の特別会計は、津市風力発電事業特別会計等の4特別会計(表2参照)が対象となるが、これらの特別会計の歳入の合計額は127億7,256万5千円で、繰越財源の額6,057万円(繰越明許費繰越額8億7,351万3千円から未収入特定財源(国・県支出金及び地方債)の合計額8億1,294万3千円を差し引いた額)を控除すると、歳入相当額は127億1,199万5千円となり、一方、歳出の合計額は126億8,013万7千円で、これに合算すべき建設改良費等以外の経費に充てるための地方債の現在高はないことから、3,185万8千円の剰余額が生じることになる。

したがって、公営企業の特別会計の実質収支は67億9,828万2千円の剰余額が生じることになり、資金の不足額は生じていない。

以上のとおり、これらの会計を連結した実質収支は106億4,948万円の黒字となり、連結実質赤字額は生じていない。

なお、連結実質収支額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 連結実質収支額の状況

(単位：千円・%)

区		分	金額等
(注) 一般会計等	津市一般会計		3,211,400
	津市土地区画整理事業特別会計		0
	津市住宅新築資金等貸付事業特別会計		481
	合 計		3,211,881
特別会計	津市モーターボート競走事業特別会計		73,846
	津市国民健康保険事業特別会計		218,870
	津市介護保険事業特別会計		256,350
	津市後期高齢者医療事業特別会計		90,251
	合 計		639,317
公営企業の特別会計	法適用企業	津市水道事業会計	6,247,980
		津市工業用水道事業会計	134,172
		津市駐車場事業会計	113,615
		津市農業共済事業会計	270,657
		小 計	6,766,424
	法非適用企業	津市風力発電事業特別会計	1
		津市簡易水道事業特別会計	996
		津市農業集落排水事業特別会計	251
		津市下水道事業特別会計	30,610
		小 計	31,858
	合 計		6,798,282
連結実質収支額 (A)			10,649,480
標準財政規模の額 (B)			66,228,474
うち臨時財政対策債発行可能額			5,100,130
連結実質収支額の標準財政規模の額に対する比率 (A) ÷ (B)			16.07

(注)純計ではない。

(3) 実質公債費比率

ア 審査の結果

実質公債費比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

なお、実質公債費比率は、早期健全化基準未満である。

表1 実質公債費比率 (単位：％・P)

決算年度		実質公債費比率	早期健全化基準 (注1)	財政再生基準 (注2)
平成23年度		10.9	25.0	35.0
参考	平成22年度	12.2		
	増減	△1.3		

(注1) 財政健全化法施行令第7条第3号に定める数値

(注2) 財政健全化法施行令第8条第3号に定める数値

イ 審査の概要

実質公債費比率は、地方債の元利償還金のほか、元利償還金に準ずるもの（以下「準元利償還金」という。）を含めた実質的な公債費相当額から充当可能特定財源の額及び地方債の元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額（以下「基準財政需要額算入額」という。）を控除した額を、標準財政規模の額から基準財政需要額算入額を控除した額で除して得た数値の3か年の平均値となる。

実質公債費比率は、平成22年度と比較すると、1.3ポイント低下しているが、その要因は、標準財政規模の額の減少などにより、実質公債費比率の算定上の分母となる額が6億5,681万4千円減少する一方、平成23年度から、久居地域、河芸地域及び香良洲地域において都市計画税の課税が開始されたことなどによる充当可能特定財源の増加などにより、分子となる額が6億5,257万3千円減少したためである。

なお、実質公債費比率の算定状況を示すと表2のとおりである。

表 2 実質公債費比率の算定状況

(単位：千円・%)

区 分	年 度		
	平成 23 年度	平成 22 年度	平成 21 年度
公債費相当額 (A) (B) + (C)	17,323,434	17,371,283	17,693,128
地方債の元利償還金 (繰上償還等を除く) (B)	12,219,517	12,442,307	12,627,471
準元利償還金 (C)	5,103,917	4,928,976	5,065,657
充当可能特定財源の額 (D)	2,378,315	1,890,726	1,769,854
基準財政需要額算入額 (E)	9,361,176	9,244,041	9,095,513
公債費相当額 - (充当可能特定財源の額 + 基準財政需要額算入額) (F) (A) - { (D) + (E) }	5,583,943	6,236,516	6,827,761
標準財政規模の額 (G)	66,228,474	66,768,153	64,946,399
うち臨時財政対策債発行可能額	5,100,130	7,654,317	4,199,172
標準財政規模の額 - 基準財政需要額算入額 (H) (G) - (E)	56,867,298	57,524,112	55,850,886
実質公債費比率 (単年度) (F) ÷ (H)	9.8	10.8	12.2
実質公債費比率 (3 か年平均)	10.9		

(4) 将来負担比率

ア 審査の結果

将来負担比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

なお、将来負担比率は、早期健全化基準未満である。

表1 将来負担比率

(単位：％・P)

決算年度		将来負担比率	早期健全化基準(注)
平成23年度		51.5	350.0
参	平成22年度	88.3	
考	増 減	△36.8	

(注)財政健全化法施行令第7条第4号ロに定める数値

イ 審査の概要

将来負担比率は、本市の債務のほか、津市土地開発公社の負債額等を対象に、本市の一般会計等における将来負担を明らかにしようとするもので、その算定方法は、将来負担額から充当可能財源等の額を控除した額を、標準財政規模の額から基準財政需要額算入額を控除した額で除して得た数値となる。

将来負担比率は、平成22年度と比較すると、36.8ポイント低下しているが、その要因は、標準財政規模の額の減少などにより、将来負担率の算定上の分母となる額が6億5,681万4千円減少する一方、地方債の現在高の減少などにより将来負担額が36億1,058万2千円減少したこと並びに平成23年度から久居地域、河芸地域及び香良洲地域において都市計画税の課税が開始されたことなどにより充当可能財源等の額が179億1,010万3千円増加したことにより、分子となる額が215億2,068万5千円減少したためである。

なお、将来負担比率の算定状況を示すと表2のとおりである。

表2 将来負担比率の算定状況

(単位：千円・%)

区 分		金 額 等
将 来 負 担 額	地方債の現在高	93,780,359
	債務負担行為に基づく支出予定額	2,531,965
	公営企業債等繰入見込額	72,002,274
	一部事務組合等負担見込額	0
	退職手当負担見込額	25,259,736
	設立法人の負債額等負担見込額	1,988,766
	連結実質赤字額	0
	一部事務組合等連結実質赤字額負担見込額	0
	小 計 (A)	195,563,100
充 当 可 能 財 源 等 の 額	充当可能基金の額	24,120,372
	特定財源見込額	31,273,173
	基準財政需要額算入見込額	110,853,497
	小 計 (B)	166,247,042
将来負担額－充当可能財源等の額 (C)		(A)－(B) 29,316,058
標準財政規模の額 (D)		66,228,474
	うち臨時財政対策債発行可能額	5,100,130
基準財政需要額算入額 (E)		9,361,176
標準財政規模の額－基準財政需要額算入額 (F)		(D)－(E) 56,867,298
将来負担比率		(C)÷(F) 51.5

2 資金不足比率

(1) 津市水道事業会計に係る資金不足比率

ア 審査の結果

資金不足比率(表1参照)及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 資金不足比率 (単位：%)

決算年度		資金不足比率	経営健全化基準(注)
平成23年度		—	20.0
参考	平成22年度	—	
	増減	—	

(注)財政健全化法施行令第19条に定める数値。以下同じ。

イ 審査の概要

資金不足比率は、資金の不足額を、事業の規模の額で除して得た数値となる(以下各会計に係る資金不足比率について同じ)。

審査に付された資金不足比率は、資金の不足額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

平成23年度津市水道事業会計決算における流動資産の額は67億9,943万1千円で、そこから控除すべき繰越財源の額はなく、一方、流動負債の額は5億5,145万1千円で、これに合算すべき建設改良費等以外の経費に充てるための地方債(以下「算入地方債」という。)の現在高はないことから、62億4,798万円の剰余額が生じることとなり、資金の不足額は生じていない。

なお、資金の剰余額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 資金の剰余額の状況

(単位：千円・%)

区	分	金額等
流動資産相当額 (A)	(B) - (C)	6,799,431
	流動資産の額 (B)	6,799,431
	控除すべき繰越財源の額 (C)	0
流動負債相当額 (D)	(E) - (F)	551,451
	流動負債の額 (E)	551,451
	控除すべき未払金等の額 (F)	0
算入地方債の現在高 (G)		0
資金の剰余額 (H)	(A) - (D) - (G)	6,247,980
事業の規模の額 (I)		5,988,969
資金の剰余額の事業の規模の額に対する比率 (以下各会計に係る資金不足比率について「資金の剰余率」という。) (H) ÷ (I)		104.32

(2) 津市工業用水道事業会計に係る資金不足比率

ア 審査の結果

資金不足比率(表1参照)及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 資金不足比率 (単位：%)

決算年度	資金不足比率	経営健全化基準
平成23年度	—	20.0
参考 平成22年度	—	
増 減	—	

イ 審査の概要

審査に付された資金不足比率は、資金の不足額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

平成23年度津市工業用水道事業会計決算における流動資産の額は1億3,518万2千円で、そこから控除すべき繰越財源の額はなく、一方、流動負債の額は101万円で、算入地方債の現在高はないことから、1億3,417万2千円の剰余額が生じることとなり、資金の不足額は生じていない。

なお、資金の剰余額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 資金の剰余額の状況 (単位：千円・%)

区 分	金額等
流動資産相当額 (A)	(B) - (C) 135,182
流動資産の額 (B)	135,182
控除すべき繰越財源の額 (C)	0
流動負債相当額 (D)	(E) - (F) 1,010
流動負債の額 (E)	1,010
控除すべき未払金等の額 (F)	0
算入地方債の現在高 (G)	0
資金の剰余額 (H)	(A) - (D) - (G) 134,172
事業の規模の額 (I)	21,792
資金の剰余率	(H) ÷ (I) 615.69

(3) 津市駐車場事業会計に係る資金不足比率

ア 審査の結果

資金不足比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 資金不足比率 (単位：%)

決算年度	資金不足比率	経営健全化基準
平成23年度	—	20.0
参考 平成22年度	—	
増 減	—	

イ 審査の概要

審査に付された資金不足比率は、資金の不足額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

平成23年度津市駐車場事業会計決算における流動資産の額は1億3,132万2千円で、そこから控除すべき繰越財源の額はなく、一方、流動負債の額は1,770万7千円で、算入地方債の現在高はないことから、1億1,361万5千円の剰余額が生じることとなり、資金の不足額は生じていない。

なお、資金の剰余額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 資金の剰余額の状況 (単位：千円・%)

区 分	金額等
流動資産相当額 (A)	(B) - (C) 131,322
流動資産の額 (B)	131,322
控除すべき繰越財源の額 (C)	0
流動負債相当額 (D)	(E) - (F) 17,707
流動負債の額 (E)	17,707
控除すべき未払金等の額 (F)	0
算入地方債の現在高 (G)	0
資金の剰余額 (H)	(A) - (D) - (G) 113,615
事業の規模の額 (I)	276,111
資金の剰余率	(H) ÷ (I) 41.15

(4) 津市農業共済事業会計に係る資金不足比率

ア 審査の結果

資金不足比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 資金不足比率 (単位：%)

決算年度	資金不足比率	経営健全化基準
平成23年度	—	20.0
参考 平成22年度	—	
増減	—	

イ 審査の概要

審査に付された資金不足比率は、資金の不足額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

平成23年度津市農業共済事業会計決算における流動資産の額は5億5,089万3千円で、そこから控除すべき繰越財源の額はなく、一方、流動負債の額は2億8,023万6千円で、算入地方債の現在高はないことから、2億7,065万7千円の剰余額が生じることとなり、資金の不足額は生じていない。

なお、資金の剰余額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 資金の剰余額の状況 (単位：千円・%)

区 分	金額等
流動資産相当額 (A)	(B) - (C) 550,893
流動資産の額 (B)	550,893
控除すべき繰越財源の額 (C)	0
流動負債相当額 (D)	(E) - (F) 280,236
流動負債の額 (E)	280,236
控除すべき未払金等の額 (F)	0
算入地方債の現在高 (G)	0
資金の剰余額 (H)	(A) - (D) - (G) 270,657
事業の規模の額 (I)	221,604
資金の剰余率	(H) ÷ (I) 122.14

(5) 津市風力発電事業特別会計に係る資金不足比率

ア 審査の結果

資金不足比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 資金不足比率 (単位：%)

決 算 年 度	資 金 不 足 比 率	経 営 健 全 化 基 準
平 成 2 3 年 度	—	20.0
参 考 平 成 2 2 年 度	—	
増 減	—	

イ 審査の概要

審査に付された資金不足比率は、資金の不足額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

平成 23 年度津市風力発電事業特別会計決算における歳入額は 8,229 万 7 千円で、そこから控除すべき繰越財源の額はなく、一方、歳出額は 8,229 万 6 千円で、算入地方債の現在高はないことから、1 千円の剰余額が生じることとなり、資金の不足額は生じていない。

なお、資金の剰余額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 資金の剰余額の状況 (単位：千円・%)

区 分	金 額 等
歳入相当額 (A)	(B) - (C) 82,297
歳入額 (B)	82,297
控除すべき繰越財源の額 (C)	0
歳出額 (D)	82,296
算入地方債の現在高 (E)	0
資金の剰余額 (F)	(A) - (D) - (E) 1
事業の規模の額 (G)	35,230
資金の剰余率	(F) ÷ (G) 0.00

(6) 津市簡易水道事業特別会計に係る資金不足比率

ア 審査の結果

資金不足比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 資金不足比率 (単位：%)

決 算 年 度	資 金 不 足 比 率	経 営 健 全 化 基 準
平 成 2 3 年 度	—	20.0
参 平 成 2 2 年 度	—	
考 増 減	—	

イ 審査の概要

審査に付された資金不足比率は、資金の不足額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

平成 23 年度津市簡易水道事業特別会計決算における歳入額は 9 億 2,357 万 6 千円で、繰越財源の額 1,499 万 7 千円（繰越明許費繰越額 3 億 614 万円から未収入特定財源（国・県支出金及び地方債）の合計額 2 億 9,114 万 3 千円を差し引いた額）を控除すると、歳入相当額は 9 億 857 万 9 千円となり、一方、歳出額は 9 億 758 万 3 千円で、算入地方債の現在高はないことから、99 万 6 千円の剰余額が生じることとなり、資金の不足額は生じていない。

なお、資金の剰余額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 資金の剰余額の状況

(単位：千円・%)

区	分	金額等
歳入相当額 (A)	(B) - (C)	908,579
歳入額 (B)		923,576
控除すべき繰越財源の額 (C)	(D) - (E)	14,997
繰越明許費繰越額 (D)		306,140
未収入特定財源の額 (E)		291,143
歳出額 (F)		907,583
算入地方債の現在高 (G)		0
資金の剰余額 (H)	(A) - (F) - (G)	996
事業の規模の額 (I)		53,543
資金の剰余率	(H) ÷ (I)	1.86

(7) 津市農業集落排水事業特別会計に係る資金不足比率

ア 審査の結果

資金不足比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 資金不足比率 (単位：%)

決 算 年 度	資 金 不 足 比 率	経 営 健 全 化 基 準
平 成 2 3 年 度	—	20.0
参 考 平 成 2 2 年 度	—	
考 増 減	—	

イ 審査の概要

審査に付された資金不足比率は、資金の不足額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

平成 23 年度津市農業集落排水事業特別会計決算における歳入額は 5 億 3,909 万 8 千円で、そこから控除すべき繰越財源の額はなく、一方、歳出額は 5 億 3,884 万 7 千円で、算入地方債の現在高はないことから、25 万 1 千円の剰余額が生じることとなり、資金の不足額は生じていない。

なお、資金の剰余額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 資金の剰余額の状況 (単位：千円・%)

区 分	金 額 等
歳入相当額 (A)	(B) - (C) 539,098
歳入額 (B)	539,098
控除すべき繰越財源の額 (C)	0
歳出額 (D)	538,847
算入地方債の現在高 (E)	0
資金の剰余額 (F)	(A) - (D) - (E) 251
事業の規模の額 (G)	127,360
資金の剰余率	(F) ÷ (G) 0.20

(8) 津市下水道事業特別会計に係る資金不足比率

ア 審査の結果

資金不足比率（表1参照）及びその算定基礎書類は、財政健全化法の定めるところにより、適正に算定されたものであると認めた。

表1 資金不足比率 (単位：%)

決算年度		資金不足比率	経営健全化基準
平成23年度		—	20.0
参	平成22年度	—	
考	増 減	—	

イ 審査の概要

審査に付された資金不足比率は、資金の不足額が生じていないものとして、「該当比率がない」ことを意味するものであるが、算定項目の数値が適正に算定されているかを審査した。

平成23年度津市下水道事業特別会計決算における歳入額は112億2,759万4千円で、繰越財源の額4,557万3千円（繰越明許費繰越額5億6,737万3千円から未収入特定財源（国・県支出金及び地方債）の合計額5億2,180万円を差し引いた額）を控除すると、歳入相当額は111億8,202万1千円となり、一方、歳出額は111億5,141万1千円で、算入地方債の現在高はないことから、3,061万円の剰余額が生じることとなり、資金の不足額は生じていない。

なお、資金の剰余額の状況を示すと表2のとおりとなる。

表2 資金の剰余額の状況

(単位：千円・%)

区	分	金額等
歳入相当額 (A)	(B) - (C)	11,182,021
歳入額 (B)		11,227,594
控除すべき繰越財源の額 (C)	(D) - (E)	45,573
繰越明許費繰越額 (D)		567,373
未収入特定財源の額 (E)		521,800
歳出額 (F)		11,151,411
算入地方債の現在高 (G)		0
資金の剰余額 (H)	(A) - (F) - (G)	30,610
事業の規模の額 (I)		2,695,754
資金の剰余率	(H) ÷ (I)	1.14